



**HAL**  
open science

## Jinruigaku, jinruigakushi kenkyū to kigen-ron

Arnaud Nanta

► **To cite this version:**

Arnaud Nanta. Jinruigaku, jinruigakushi kenkyū to kigen-ron. 生物学史研究, 2024, 104, pp.33-36. <halshs-04702029>

**HAL Id: halshs-04702029**

**<https://shs.hal.science/halshs-04702029v1>**

Submitted on 26 Nov 2024

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

# ÉPREUVES 初稿

シンポジウム：人類学の歴史と社会

コメント：人類学、人類学史研究  
と起源論

アルノ・ナンタ\*

日本科学史学会生物学史分科会の2023年シンポジウムにおいて、太田博樹、瀬口典子、佐藤桃子、坂野徹諸氏による4つの発表が、人類学の歴史と社会との関係について、特に人間集団を対象とする自然人類学的研究とその意義や問題性について論じた。

四半世紀前に、日本国立科学博物館人類研究部長を勤めていた山口敏（1931-2020）は、いわゆる「日本人の起源」論争に加担して、『日本人の生いたち』（1999年）で、「日本列島に住んでいる人たちが、いつごろ、どこから移り住み、どういう経緯をたどって今日に至ったかを、自然人類学の方法で探究」しようとし、なおかつ、「<日本人>とは何かという問いの根源にかかわる<人種>という問題について自然人類学の立場から考察を試みた」と書いている（序文）。こうした姿勢は、21世紀前夜日本において、この論争がどれほど根深いかをよく物語る。山口は人骨研究のみならず、2023年現在国立遺伝学研究所に勤めている齊藤成也（1957年生まれ）による遺伝学研究成果にも基づいて（『モンゴロイドの地球』95年）、すなわち、新しい研究手法を駆使しつつ、19世紀に誕生した、従来通りの「人種的」な学問を反復し、繰り返していたのである。この学問というのは、国民の起源を探求するという試みであり、国民を血統集団つまり「民族」として捉えようとする、形質・体質・自然人類学である。こうして、客観的であるはずの科学の一分野が、政治的な言説に変身するのである。

実践

戦前の医者・形質人類学者の清野謙次（1885-1955）の言葉を借りて言えば「民族の生成」、あるいは一定時に出現したという意義を持つ「民族の起源」といった用語は、合理化された、つまり科学として展開する、こうした政治的な言説を指すものである。これは、近代日本の場合、「日本人の起源」論に相当するものであり、坂野徹や私・ナンタが長年研究を重ねたテーマであるが、坂野徹著『縄文人と弥生人』（2022年）が出版されて明らかになったように、現在の日本社会には、日本人の起源を探知しようとする研究者が大勢いる一方、こうした営みそれ自体を分析しようとする研究者もいる。無論、このシンポジウムの登壇者らの立場は後者である。瀬口典子の発表「脱人種主義・脱植民地主義時代の生物人類学：21世紀の生物人類学の新たな挑戦」で判明したように、20世紀日本の形質・体質・自然人類学は、いわゆる「民族生成/起源の探究」からいまだに脱していないということである。ホモ属と古代ゲノム学を紹介した太田博樹発表「スヴェンテ・ペーボ氏のノーベル賞受賞と古代ゲノム学の歴史」と、

\* Ens De Lyon, IAO 15 Parvis Rene Descartes 69007 LYON France  
フランス国立科学研究センター CNRS 教授

ENS de Lyon  
[小文字] [RR]  
[大文字]

「民族の起源」の探究を批判した瀬口典子発表の内容は、ある意味で、科学という営みの内に現在続行する隔たりや緊張感を表わすものと言える。

「民族の生成」あるいは「民族の起源」論争は、基本的に、「科学」の領域に属する問題提起ではなく、19世紀に形成された国民国家そしてこれに関わるナショナリズムと深い関係を持つ問いである。一国民を、何よりも生物学的な集団つまり血統で結ばれた「民族」として捉え、他の国民とは異なるモノだと決めつけようとする考えは、19世紀に誕生した人類学という学問にとって不可欠な課題であり、この学問にとって一つの使命でもあった。19世紀に抬頭したナショナリズムという思想は、そもそも「市民」をベースにした政治思想であったが、しかし帝国主義を背景に、国際競争が激しくなるにつれ、「国民」を生物学上の一集合体として捉えなおし、アイデンティティを固定化していく思想と化した。こうしたプロセスは、近代に特有な、科学的な人種主義とも繋がった。

第二次世界大戦というグローバルな経験、そしてユダヤ人ジェノサイドを経て、フランスとイギリスの研究費と国家支援をもって、反ユダヤ主義の歴史研究で有名であるレオン・ポリアコフは1971年に、欧州におけるナショナリズム、「民族」の起源論争、形質人類学、そして人種主義の相互関係史について先駆的な著書『アリア神話：ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』を出版した（和訳1985年）。この著書は恐らく、19世紀フランスの形質人類学者ポール・ブローカ（1824-1880）やドイツのフィルヒョウ（1821-1902）の思想と科学的実践を、ナショナリズムと科学的な人種主義に初めて結びつけた研究書であろう。この経緯をもって、1980-1990年代から、欧州や日本に、優生学、人類学、自然人類学の歴史研究に着手し、これら学問が「民族の起源論争」にどれほど加担したかを問題視する研究者が現れた。こうした新しい研究の流れが、このシンポジウムに到るものである。

19世紀に組織化された近代人類学にとって自国民をどう捉えるかという課題が中心的テーマだったが、同時に、もう一つの不可欠な課題があった。これは、植民地帝国の形成期にあって、植民地支配と連動する、あるいは植民地支配の為に機能する学問領域として斯学＝人類学をつくることであった。21世紀現在になっても、人類学と「モノ化された他者」との関係が、植民地帝国時代の残滓として残っている。なお、21世紀日本にあって、日本が植民地帝国だった時代の残滓として、アイヌ先住民族問題が依然として残っている。今回のシンポジウムにおいて、それぞれの発表の共通点としては、実に、人類学という学問分野が脱ナショナリズムを果たしていないのみならず、脱植民地化も果たしていないという点であろう。

瀬口典子発表において指摘されたように、19-20世紀人類学の残滓という問題は、二つの異なる次元に及ぶものである。一つ目は、植民地時代に収集された物的文化つまり物品や人骨のコレクションという課題だ。この課題は帝国の時代に植民地領土を有した国々が世界中共有する問題であり、例えばフランスではパリ・トロカデロに位置する国立人類館 Musée de l'Homme の膨大な人骨コレクションは絶えず外交問題となっている。このコレクションの中に、殉国し

たアルジェリア独立運動家の人骨が保存されている他に、いまだに植民地支配同然の状況が続いているニューカレドニアのカナック人の、墓地で盗難された人骨も保管されている。2022年11月にパリ・国立人類館にて、〈人類学の歴史〉をテーマに3日間のシンポジウムが開催され、私・ナンタも参加したのだが、登壇者中に発表した博物館員らは、植民地時代に収集された人骨に触れた際、当の人骨は科学研究の為に使い続けるべきだとの意見を呈し、アルジェリアやニューカレドニアの請求権を全面否定する立場をとったのである。フランスの植民地時代を清算する必要はないとの考えの上、研究資料である人骨が無くなる状態に対する身勝手な恐れを明白に示した無責任な発言だったと言えよう。こうして、人骨返還プロセスはアメリカ合衆国とカナダにおいて進行してきたにもかかわらず、フランスや日本においては、全く動じない状態が続いている。

そして瀬口典子発表が指摘した通り、もう一つの次元は、エピステーメつまり思想レベルに深く根づいている。この問題のほうが、人類学という学問それ自体の進歩を妨げる、つまり人類学の脱植民地時代を妨げるのである。人類学研究の「領域」というのは、社会学、歴史学、人類学の相互関係と境界を問う課題でもあるが、21世紀現在、他の学問分野とは異なり、研究方法で自己定義するのではなく何よりも研究対象である「モノ化された他者」あるいは「生物化された人間集団」をもって、自己定義する「人類学」という学問が抱える学問上・倫理上の問題は依然として根強い。この中において、佐藤桃子発表は、日本の研究者らがアイヌ先住民族に対してどのような研究倫理を開発しようとしているか、というプロセスに着目した。確かに「倫理」上の問題が解決されない限り、人骨の返還プロセスが進行しないだろう。広義の(形質・体質)自然人類学がなぜ先住民族にこう着目して研究し続けているのか、そしてこうした研究成果をもって植民地時代にあった眼差しを温存させているのではないか、といった問いが21世紀現在になって一層強く意識されることだろう。

日本における近代人類学と「日本民族起源論争」を長年研究し重ねた坂野徹の発表が明白に提示したのは、人類学研究それ自体に対する問題意識が、現在、依然として乏しい、という現状である。上記に言及した事情に戻って、遺伝学という相対的に新しい手法をもって、従来の人種研究の延長線上に同じ問題提起で同じ(人間集団を生物化する)研究を続行する学者らが2022年刊行の『縄文人と弥生人』を批判したのは、ある意味で、予想できた「甲論乙駁」状態だっただろう。

これよりも、『縄文人と弥生人』を購入して、実は「日本人の起源」を扱った人類学研究ではなく、日本の人類学それ自体を俎上に置いて研究対象とする著書であることに気づき驚いた人が多かった、との話のほうが興味深い。つまり、カテゴリーの構築性や学問研究の政治性など、今まで考えたことすらなかった問題提起を、そういう読者らが意識する機会になった本なのであり、社会への学問の普及に大変貢献した本だということである。これからも、人類学研究の自己意識が変わっていくこと、~~そして~~人類学が包含する諸問題が克服されること、そして

H/V

歴史学研究がますます進行していくことを願いたい。

#### 参考文献

- 太田博樹『古代ゲノムから見たサピエンス史』吉川弘文館 2023年
- グールド、スティーヴン J. 『人間の測りまちがい：差別の科学史』増補改訂版、鈴木善次・森脇靖子訳、河出書房新社 1998年
- 坂野徹『帝国日本と人類学者』勁草書房 2005年
- 坂野徹『縄文人と弥生人：「日本人の起源」論争』中央公論新社 2022年
- 百々幸雄編『モンゴロイドの地球』第3巻『日本人のなりたち』東京大学出版会 1995年
- ナンタ、アルノ (NANTA, Arnaud) “Physical Anthropology and the Reconstruction of Japanese Identity in Postcolonial Japan”, *Social Science Japan Journal*, Oxford University Press, 11-1, 2008
- ナンタ、アルノ「日本帝国の形質人類学を問い直す：清野謙次の日本民族混血論」坂野徹・慎蒼健編『帝国の視覚/死角』青弓社 2010年
- ナンタ、アルノ「人種主義と科学者の<中立性>：アンリ・ヴァロワの活動を中心に」竹沢泰子・坂野徹編『科学と社会の知』東京大学出版会 2016年
- レオン・ポリアコフ『アーリア神話：ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』アーリア主義研究会訳、法政大学出版会 1985年
- 山口敏『日本人の生いたち』みすず書房 1999年